



# ラストファリアンの讃美歌 : ジャマイカ・ラスト ファリ運動のナイヤビンギ音楽(1)

長嶋, 佳子  
柴田, 佳子

---

(Citation)

史境, 3:56-68

(Issue Date)

1981-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001728>



# ラスタファリアンの讃美歌

——ジャマイカ・ラスタファリ運動のナイヤビンギ音楽(1)

長嶋 佳子

## 一、はじめに

「ラスタ」音楽は、日本では(故郷のジャマイカでもそうだが)レゲエ(Reggae)として知られている。<sup>(1)</sup>レゲエとは、つい五月十一日急逝したスーパースター、ボブ・マーレイが代表的ミュージシャンの一人で名を覇した、ジャマイカはスラム生まれのポップラー音楽である。その誕生、育成に多大な貢献をしたのが、ラスタファリアン(Rastafarian)と呼ばれる人たちである。ボブ・マーレイも然り。ゆえにレゲエは、ラスタ(ラスタファリアンの略称)音楽とほぼ同一視されてきた。

ジャマイカの人口約二二〇万のうち半分以上がラスタである、という幾分大袈裟な表現も飛び出す程、彼らは一大勢力となつて

いる。この中にはレゲエ関係者も含まれる。が、ラスタの中にも、レゲエはラスタの音楽でないと断言する者はかなり存在する。その彼らは自らの音楽をナイヤビンギ(Nyabingi)<sup>(2)</sup>と称し、これこそが「ラスタマンのルーツ音楽」と鼻を鳴らしているのである。ラスタファリアン(＝ラスタマン)の定義には、様々な理由で困難があるが、ここでは故エチオピア皇帝、ハイレ・セラシエ(Haile Selassie I 在位一九三〇～七五)<sup>(3)</sup>を神格化し、あるいは特別な敬意を払う対象とする者とする。<sup>(3)</sup>セラシエが戴冠前の名をラス・タファリ(Ras Tafari)<sup>(4)</sup>と称したことにより、ジャマイカの信奉者、追従者たちはラスタファリアンと呼ばれた。彼らは一九三〇年以降、紆余曲折を経ながらもその数と影響力を増大して今日に至っているので、全体を運動体(ラスタファリ(アン))

運動)として把握することにする。

同運動はその発生当初より、一般的にアウトサイダーやアウトローの「奇異な」宗教といった社会的汚名を濯がれてきた。それで、国内での調査・研究の対象にはあまりならず、多くの偏見と侮蔑に満ちた解釈が施され、たいていはその実体と現状認識に欠けたステレオタイプが蔓延している。彼らの集会で音楽は欠かせないが、近辺の者がその音を耳にし、また惹かれて覗きに來ることがままあっても、それはごく限られた者で、ナイヤビンギ音楽は一般国民にはほとんど知られていないと言ってよい。このスラム音楽はドラムが中心であり、「アフリカの」過ぎて粗野(「野蛮」)に聞こえたからであった。そこには、奴隸制時代より受け継がれてきた人種や色に対するパラノイア的偏見に一因する、複雑なアイデンティティ問題を含むものがあるのである。

本稿では、カリブ海地域(特に英語圏)において各界の多大な関心と論議を集めているラスタファリ運動理解のため、また同運動を通してジャマイカ社会・文化の、ひいては「新世界のディアスポラ」、すなわち底辺層の黒人のアイデンティティを探るために現地で調査・研究した資料をもとに、彼らのナイヤビンギ音楽の一部を、簡単に紹介し論ずる。

## 二、ナイヤビンギ音楽へのアプローチ

### 1 意義

カリブ海地域の文化において音楽の役割・機能が特に重要であることは、周知の通りである。そしてその核が、奴隸貿易で運ばれた西アフリカの黒人とその子孫によって形成されたことも、ジャズやブルース(北米)、ボサノバ、サンバ(ブラジル)、あるいはカリブソ(トリニダード)やルンバ(キューバ)を知る者なら既知のことであろう。

ジャマイカのポピュラー音楽はスカー(ska)次にロック・ステディ(rocksteady)、そしてレゲエへと発展してきた。この形成過程については別途に論ずることにするが、ポピュラー音楽発生に多大な貢献をしたのがラスタファリアンである。彼らの思想、信条や鋭敏な社会感覚は、当然のことながら音楽に反映されてきた。

アフリカ音楽の特徴すなわち、ドラムその他の打楽器の重要性、複雑なリズム(感覚)、鼻音がかった、あるいは平たい発声法、反復、呼応方式、短いフレーズ、西欧的終止法無視等の構造、歌詞の社会性、また豊富な即興性等は、カリブ海地域にも継承され、それらを軸に新しい創造が成されてきた。ジャマイカにおける種々の民俗音楽にも、またポピュラー音楽にも、これらの特徴は基本的に見い出される。ラスタファリ音楽(ナイヤビンギでもレゲエでも)も同様である。

ナイヤビンギ音楽はポピュラー音楽と違い、前述のように、ラスタファリアン以外にはほとんど知られていず、彼ら自身の儀式

や「グラウネイション」(grounation)<sup>(5)</sup>、その他種々の集まりでのみ聞かれるものである。特にこのグラウネイションは、彼らの宗教的アイデンティティを発露し、かつ教育的、また娯楽的意義をも持つだけに、聖俗不可分の「最も大切な時」とさえ考えられている。その時表出する(身体器官、楽器、環境より発する)音は、まさに彼らのアイデンティティを示す。これを抜きにしてはラスタファリ研究は骨抜きとなる。ラスタファリアンに依る貢献が大きかったポピュラー音楽を考察するうえでも、両刃の剣の片面として、ナイヤビンギ音楽研究は大切なのである。

## 2 調査目的

本研究は、現地でのフィールド調査が中心となった。音楽研究の重要性はラスタファリ運動の実態調査と、現代ジャマイカ文化の現状理解を目的としていた筆者が、現地経験で目醒めさせられたことの一つであった。ジャマイカには、音が溢れていた。街では、商店街から、バーから、ディスコからポピュラー音楽が大きく鳴り響き、道行く人々の中に、そのリズムに合わせて(時には身体をゆすって)歩き、口ずさみ、また携帯ラジオを耳にする者を多く見つけることができる。音楽のあるところ、人がたまり、コミュニケーションの場となる。ジャマイカ人の音楽好きは有名で、「骨の髄まで感じ、皮膚の下まで音楽が咬む」とさえ言われる。

またジャマイカは、口伝えコミュニケーションの国、口承伝統

が生きている国である。人々のおしゃべりは社会の核ともなっている。(これも祖先西アフリカ人の無文字文化の伝承とされる。)露店売りや行商人、また知合い同士の会話、ましてや市場となると、かん高く張りのある声の洪水に取り囲まれることとなる。そして、ジャマイカ英語のパトワ(patwa)は、抑揚の激しい、それ自身が音楽のような言葉である。そして国民の大半の下層階級は、小学校を出ていれば良い方とさえ言われるように、正規の学校教育の水準と程度も低い。少なくともこれらのことは、調査者を生の音声へ、日常生活の現実<sup>リアリティ</sup>へ、身体器官を総動員させることに向かわしめたのである。

## 3 調査方法

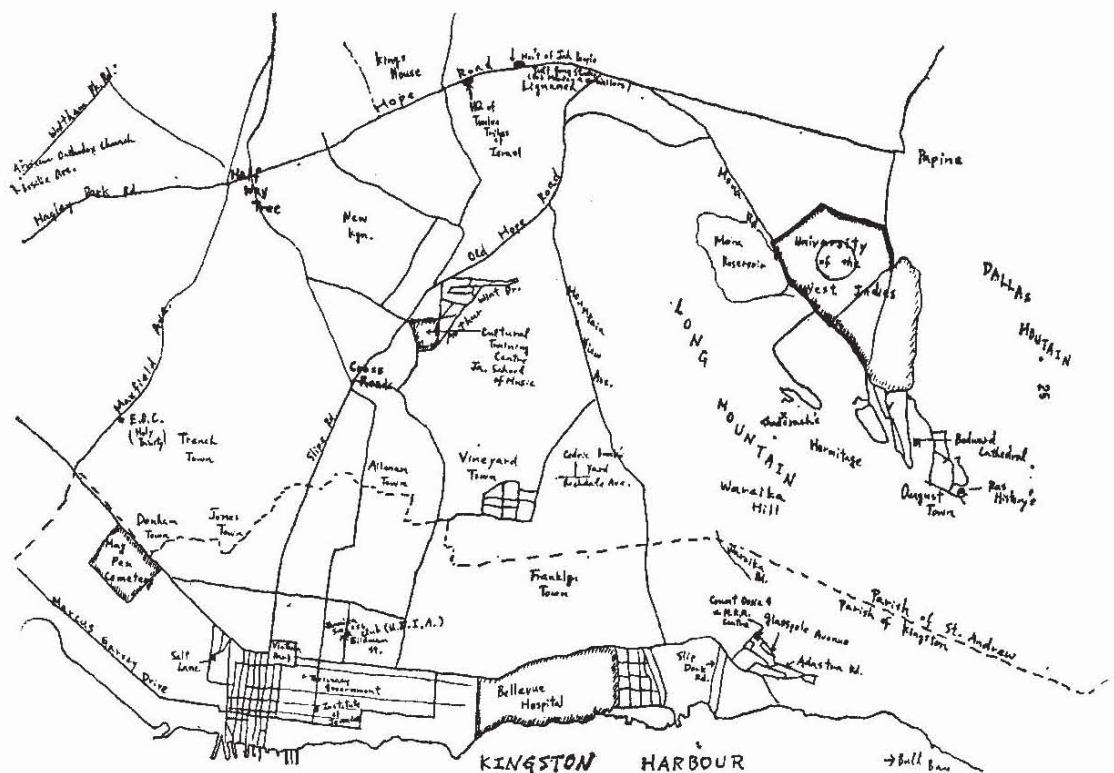
特定の調査期間を予め設定することは、筆者を取り巻く地理的条件・社会環境ゆえ不可能で、ラスタファリの集まりがあると知るや、滞在中(78年10月～80年7月)、可能な限り都合をつけて参加するようにした。また普通の集まりで定期的に行なわれることが知られている場合は、集会所付近の政治・社会情勢や交通手段、インフォーマント(必ずしも伴ってはいなかったが)の都合等により参加した。

ラスタファリは様々な所で様々な集会を持つため、一般化することを困難ならしめる程であるが、大きな集団・組織とごく少数のケースを含み、その多様性をも把握することに努めた。情報提供において有益であった主たる調査地は「地図1・2」を参照さ



▲MAP I JAMAICA : Parishes and Research Locations

▼MAP II Some Parts of Kingston



※オーガスタウン所在地

表1 ジャマイカの民俗音楽 (Folk Music) の分類

| Religious                      | Secular                            |                                      |
|--------------------------------|------------------------------------|--------------------------------------|
|                                | work                               | Social                               |
| I, Revival a, Zion<br>b, Pukko | A, Digging                         | A) Dance-Mento                       |
| 2, Kumina                      | B, Sugar boiling                   | Brukins                              |
| 3, Rastafarian                 | C, Picking-cotton<br>pimento, corn | Tambo                                |
| 4, Gumbay                      | D, Planting-corn<br>peas           | Ettu                                 |
|                                | E, Timber cutting                  | Jonkonnu                             |
|                                | F, Rice beating                    | Set dance                            |
|                                | G, House cleaning                  | B) Play-rising play<br>singing games |
|                                | H, Women's work                    | C) Set up-nine night<br>gerreh       |
|                                | I, Fishing                         | dinkyminny                           |
|                                | J, Boat loading-<br>bananas        | banga                                |
|                                |                                    | D) Love                              |
|                                |                                    | E) Ballad                            |
|                                |                                    | F) Nursery                           |
|                                |                                    | G) Teameeting                        |
|                                |                                    | H) Political                         |
|                                |                                    | I) Rastafarian                       |
|                                |                                    | J) Nago                              |
|                                |                                    | K) Maroon                            |
|                                |                                    | L) Anancy                            |
|                                |                                    | M) Canterfables                      |

Olive Lewin

Source:

"Folk Music of Jamaica-An Outline for Classification",

Jamaica Journal, June 1970, Vol. 4, No. 2., P. 68

(Quarterly of the Institute of Jamaica, Kingston)

れたい。

ラスタファリアンの中には、これまでに欧米からの人類学者等の調査活動により、不快な経験を持った者が多くいた。そのこともあり、また彼らの中に物資主義を忌避する者がかなり存在したこと等により、カメラやカセットレコーダーの使用は限定された。その場でのノートとりも禁じられたこともあったが、基本的には参与観察方法をとり、また特別な個人的、あるいは集団的インタ

ヴェーも行った。

#### 4 調査内容

当初の目的がラスタファリ運動自体の実態を探ることにあつたため、ナイヤビンギ音楽の調査もその一環として行なった。様々なラスタファリアンとのコミュニケーションは、自然に彼らの世界の内奥へと導き、運動の中心を成す宗教観の確認と高揚の場グラウネーションの存在と、そこでの音楽の役割が非常に重要であることを認識した。この体験を通しての認識

をもとに、彼らのアイデンティティに迫るための直接・間接の資料として、音や音楽でしか表現しえないものやそれらを通してより明らかにされるものを調査内容とした。本稿ではその一部を紹介する。大別すると、ナイヤビンギ音楽の成立過程(起源)と表現(内容)、そして意義(機能)である。今回は成立過程までを紹介する。

なお、ジャマイカ音楽全体での様々な視角からの比較研究も可能であり(民俗音楽については「表1」参照)重要と思われるが、別の機会に譲りたい。常に引合いに出される正統派キリスト教の讃美歌やゴスペル・フォーク等とはほぼ同様の役割・機能を担っている

が、詳しい比較研究も割愛する。先にレゲエとナイヤビンギ音楽は違ふと述べたが、その比較やポピュラー音楽自体についての考察も、紙面の都合上、省略したい。

### 三 ラスタファリ讃美歌成立の歴史（概略）

#### 1 キリスト教の伝統

一九三〇年に誕生した当時より、ラスタファリ主唱者／信者は首都キングストンのスラム出身で、キリスト教の一派とされる（「正統派」からは異端視されることが多い）ブラック・リヴァイヴ派の影響を強く受けていた。それは、奴隷制時代に導入されたキリスト教が、黒人奴隷の間で白人のものとは違った独自の展開をし、今日に至るまで下層民の中で支持を得ているものである。それ自体、多岐に亘る形態を示すが、主として中流階層以上の信者が主流である正統派の礼拝や伝道会・祈禱会等の諸集会の有様と異なり、身体器官を全て開放してのダイナミックな音と律動の世界をかもし出す。

楽器に関しては、一般的に正統派教会ではピアノやオルガン（パイプオルガンを含む）といういかにも西洋の伝統継承を伺わせる鍵盤楽器が中心に使われるか皆無（経済的理由等による）であるのに対し、ブラック・リヴァイヴ派では二、三種類の太鼓やタンバリン、マラカス等の打楽器が中心であり、稀に、カステネットや竹笛が加わることもある。

I・D・サンキー(Sankery)の讃美歌等が双方で用いられるが、発声法や歌唱法に各々の文化的差異が表われ、後者では前述のようなアフリカ的特徴が顕著になる。例えば、リーダーがまず歌詞を大声で読んで残りの者が同じ箇所を歌う（時には叫ぶ）呼応方式の変形や、また即興が頻繁に行なわれる。楽器によるダイナミックなリズムに合わせて身体全体を動かし踊りながらの讃美が行なわれ、そのリズムと熱狂のうちに（ラム酒等も手伝って）スピリット・ポゼション（憑依）が頻繁に起こり、奇声が聞こえる。リズムを手で叩き、感情的表現は音となり自由に発せられる。よく集会が街頭で行なわれるが、信者以外に集まった人々を讃美の唱和へ、踊りへと引き込む。

ラスタファリアンの多くが讃美歌を継承し、その歌詞の一部を彼らの信条に合わせて変えている（後述）のも、信者の多くがジャマイカ全体のキリスト教化、特にこのブラック・リヴァイヴ派の伝統より生まれたことで説明がつく。ラスタファリ讃美歌の成立、ナイヤビンギ音楽の形成や発展は、取りも直さずラスタファリ運動そのものの成立と展開、特に独自のアイデンティティを形成し発展させてきたことを物語る。キリスト教の影響を色濃く受け、聖書を聖典とし、独自の解釈を施し、讃美歌をこよなく愛し、それを基礎に数多くの独自の「讃美歌」を編曲作曲してきたのである。

ラスタファリアンの独自性は、主として彼らなりの聖書解釈に

よる神観や宇宙／世界観 (cosmology) にある。ラス・タファリ (セラシエ) を唯一の神、黒い神とし、黒人優越主義に傾き、正統派キリスト教の説く原罪―贖罪中心の福音主義ではなく、性善説に近い人間謳歌の立場をとる。「魂」の救済より社会的 (世俗的) 救済を主張するが、これらにはカリブ海地域特異の歴史的背景があることは特筆に値する。

## 2 先駆者としてのガーヴェイ運動とベドワード派

ここでは省略せざるを得ないが、「史上最大」で「最も過酷な」奴隷貿易、奴隷制、四百年余の植民地支配、人種 (黒人) 差別等々の言い古された汚点は今も尚、根深く人々の心に棲みつき、決して過去のものではない。運動の誕生当時は様々な社会的混乱もあったが、合衆国においてより名声を博し偉大な貢献をした黒人復権運動の主唱者の一人、マーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey, 1887~1940) の後継者／末裔とラスタファリアンが言われる (また彼らの多くは、ガーヴェイを偉大な予言者と見做している) のも、文化・社会・政治運動体ともなる同運動発生の歴史の必然的要因であったと言える<sup>(10)</sup>。が、彼の「黒い神」観は正統派キリスト教の神を黒くしたことに大きな意味があり、どちらかと言うとラスタファリアンが最も忌み嫌うカトリシズムに近い要素を持つ。しかしながら、ラスタファリアンのなかでも「エチオピア正統教会」 (Ethiopian Orthodox Church, 一九七〇年にジャマイカへ到来) や「エチオピア・インターナショナル・コングレ

ス」 (Congress) と略され通称「ボボ」 (Bobos) と呼ばれるグループ等は、その儀礼において、彼らの理想・たてまえとは矛盾するようなカトリシズムの雰囲気漂わせていた。

また一つの歴史的要因に、A・ベドワード (Bedward) の率いたブラック・リヴァイヴァル派の、体制への反乱と黒人としての存続回復についての提唱がある。キングストン東北部のスラム (「地図2」オーガスト・タウン) で発生し、病氣治癒などの奇蹟 (の効果) ゆえに信者が夥しく増加した。現在は微小だが、一九二〇年代当時は、政治的にも植民地当局に抗議行進するなどして大衝激を与えた。彼の「不吉な」あるいは奇妙な予言は世間の注目・嘲笑の的ともなり、歌にされた程である。神観や聖書の解釈めぐりラスタファリアンとは相入れない部分がかなりあるが、黒人としての自覚と主体性の回復は、ガーヴェイ運動と共に、かなり吸収されたと言える。

ガーヴェイ運動やベドワード派は、各々の音楽的要素よりもむしろ社会・文化的思想面で影響を及ぼしたが、これは後述 (「表現」の項) するように、歌詞においても反映されている。

一九四〇年代後半になるまでラスタファリアンのほとんどは、ブラック・リヴァイヴァル派と同様の音楽しか儀礼音楽として知らなかった。同じスラムに肩を寄せ合いながらも、はっきりと異なる神観と聖書解釈は、<sup>おのずか</sup>自と生活様式の相違を次第に生み出してゆくことになる。また双方で信者獲得のため集会を開いたりして

オスティナート  
【楽譜1】ラストファリアンとブルの基本的リズム・パターン

ラストファリアン

(高音)

ベース | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

(低音)

フンデ | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

ブル

ベース | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

フンデ | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

※リピーターについては、後で「表現」の項で紹介する。

cf. ラストファリアン・ベースのヴァリエーションの例

| : ̇ ̇ ̇ ̇ : | | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

| : ̇ ̇ ̇ ̇ : | | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

オスティナート  
【楽譜2】ラストファリアン、ブル、クミナの基本的リズム・パターンの相違

ラストファリアン・ベース | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

ブル・ベース | : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

クミナ・バンドウ

(高音)

| : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

(低音)

| : ̇ ̇ ̇ ̇ : |

ていたブル (Buru) と呼ばれる人々の中のドラム名手を師と仰いでいた。ナイヤビンギ・リズムが彼自身の創意とインスピレーションに依る所が大きかったとは言え、ブル音楽のリズム感覚は身についていたと言えよう。両者を聴き比べてみて (テンポはブルの方がやや速いが)、数多い民俗音楽のリズムの中でこれ程酷似しているものはなかった。それを音譜で強いて表現すると上記のようになる。

一九四〇年代当時は、ブル音楽と言え、侮蔑をも含めた意味で「非常にアフリカの」であると

意を用い、相互関係は時には険悪になる程、敵対感情も存在したと言う。ラストファリアンにとって、徐々に「新しい」彼ら独自の音楽が必要になったのは、底辺層の黒人が聖書という最高の權威を武器に、ブラック・リヴァイヴァル派とも違う予言の成就を新しく発見 (覚醒) し、それにふさわしいアイデンティファイケーションの形成が、希求されたからであろう。

3 ブル (Buru) の影響について

ナイヤビンギ音楽の形成と発展に一大貢献をしたのは、故カウント・オシー (Count Ossie) であった。ジャマイカーのマスター・ドラーマーであり、ナイヤビンギ音楽に特有なリズムパターンの生みの親と言ってもよい人物である。少年期のスラム生活でラストファリアン信仰を持った彼は、同じくスラム居住者で「賤民」、「社会的落伍者」等とラストファリアンにも似たような汚名を濯がれ

されていた。都市化に伴う地方より都市への人口流入は、最大の都市キングストンにも世に悪名を轟した一大スラムを形成した。そこで出会ったブルとラスタファリアンの間で、相互に欠けているものを補充し合い、魅力を与え合う、という磁力関係のようなものが見られたのである。ラスタファリ信仰とその黒人意識と文化の覚醒と活性化は、特に底辺層の黒人で個人的な、また社会的な欲求不満と苦悩を嘗めさせられた者に強くアピールしていた。

ブルには個々の宗教はなく、各人各様であった。そして、「アフリカ」を唱え、グラウネーションという特有な交わりを持ち、明確なアイデンティティを与え得る要素に満ちたラスタファリ運動に、ブルの多くが吸収された。ブルの「社会的」音楽を共に楽しみ共有するなかで、ラスタファリアン独自の音楽を求める試みが意識的・無意識的になされ、ナイヤビンギ音楽形成にブル音楽が大きなヒントになったのである。それはドラムその他の打楽器の種類、名称、作成法、形態等にも示される。<sup>(12)</sup> カウント・オシーは、バケツ、鍋、ドラム缶等周辺の物を叩いて長年修練を積んだ後、ブルのマスター・ドラマーに彼個人のドラムを作成してもらった。

#### 4 クミナ (Kumina) の影響について

ブル程の影響力は無いが、音楽としての要素でナイヤビンギ音楽形成の貢献に一役あった可能性を論じられるもう一つの伝統は、クミナ (Kumina) である。ブルは「アフリカの」とされるわり

には先祖からの口承伝統が受け継がれず、またさして重要な伝統を担っているとは考えられてこなかったためもあり、アフリカとの事実上の関係も、またジャマイカでの歴史的展開もほとんど知られていない。(調査・研究の対象では、この音楽面を除いてはほとんど皆無であった。) それに反してクミナは同じくマイノリティであり、その伝統も衰退しつつあった。が、近年のアフリカの文化遺産の見直しの活発化に伴い、クミナの長老達が今だにそのルーツであるコンゴ文化を濃厚に保持している(その言語のキコンゴ (Kikongo) は歌詞にも表われる) こともあり注目を浴び、国を挙げての音楽と踊りのフェスティヴァル等を見てもわかるように、その伝統芸能はリヴァイヴァルされている。「写真参照」

ナイヤビンギ音楽への影響については、現在賛否両論ある。詳細な分析と論議は省略するが、焦点はドラムのリズムである。一方は、そのリズム・パターンが似ているだけでも有力な証拠になるとするが、他方は楽器やテンポ等に関する他の音楽的要素、また宗教や宇宙/世界観、生活信条や様式を含む文化的要素の相違をより重視し、前者を否定する。

その基本的なリズム・パターンの音楽表記は「楽譜2」のようになる。クミナでは二つのドラムが使われ、一方をバンドゥ (Kbandu)、他方をプレイング・キャースあるいは単にキャース (playing cast or cyas) と呼ばれる。基本的リズム (オスティナート (ostinato) パターン) はバンドゥによって生み出され、



フェスティヴァルに出場したクミナの伝統を持つセント・トマス行政教区の有志。老若男女を問わず奏し、歌い、そして踊る。  
(写真上)

真正正銘のクミナ・ドラマー二人。右端のドラマーと立って削り器 (scraper) をこすっているのは、ジャマイカで最も著名と言われるジャマイカ・フォークシンガーズのメンバー。(写真下)

ラストファリアンやブルのベースとフンデの組合せと似たパターンとピッチを示す。

しかし、クミナのテンポは非常に速く（「アレグレット」から「ビバーチェ」位に亘る）、その速度を落として（ナイヤビンギでは「アンダンテ」から、熱狂的に高揚してもせいぜい「アレグレット」まで）ようやくラストファリアン・オスティナートに似る程度である。またブレイング・キャース（バンドゥよりやや小さめ）によって奏されるリズムは、ラストファリアンやブルのリピーターと同様「語り」の役割を果たしているが、その「カット」（奏法）は異なる。また「写真」で示されるように、双方のドラムは向かい合って馬乗りされ、片方のドラムの後方から第三奏者がドラムの胴部外側を二本のバチで叩く。これは、ラストファリアンにもブルにも、またジャマイカ中でも見られない、クナミ独自の奏法である。

クミナはドラムだけの宗教音楽である。儀礼の最中にのみ奏され、その強烈なドラム演奏は独自の踊りを伴わせる。歌詞にも彼らの宇宙／世界観が反映されるが（本稿では省略する）、そのような強い宗教性とコンゴ・アンゴラ地域に起源をもつ歴史的事実等は、たとえ長いクリオール化（クリオリゼーション Creolization）過程でクミナの本来の機能が失われつつあっても、それに比べれば父祖の地、アフリカの伝統をほとんど継承していない、新しいラストファリアンの宗教とは全く異質のものである。クミ

ナにキリスト教の影響はなく、歌の旋律も歌詞も、讃美歌的な西欧の響きはない。

また、黒人下層民のものという点では共通しているが、同じスラム地区に住んでいても、（宗教観の相違による理解不足等の理由で）相互に反目していたこともあるという。あのカウント・オシーはクミナの伝統の強いセント・トマス行政教区出身でもあり、その宗教にも音楽にもある程度通じていた。が、自らの、また大多数の国民の黒人「ルーツ」はアフリカにあると自覚し、アフリカの伝統遺産を尊重はしても、ラストファリアン信仰に生きる彼は、それから来るインスピレーションや音楽的素質等によってナイヤビンギ・リズムを編み出したのだ、とする説の方が説得力に富むようである。

以上、ナイヤビンギ音楽形成に思想面を除いて影響したと考えられる国内の二つの伝統、ブルとクミナについて簡単に述べた。歌詞は思想を直接的にも反映するが、繰り返し述べているように、讃美歌／キリスト教の影響が色濃く反映され、それにラストファリアン運動独自の世界観と言語表現（「ラストローグ」(Rastalogue)、「アイタル」(Ital) 言語(言葉)等々と呼ばれる）を重ね合わせて歌われている。ゆえに、その旋律は讃美歌調であったり、またアフリカの、あるいは西欧調のものがほとんどあると言ってもよい。これらについては、次回に表現内容を紹介する際に例示す

ることにする。

(次回に続く)

註

- (1) レゲエ (Reggae) については、拙稿修士論文 (Shibata, Y.) の特に Ch. VII を参照されたい。
- (2) アルファベット表記は他にもある。意味は「抑圧する白人どもに死を！」で、ケニアのマウマウが使ったものを真似たと言われる。ラスタファリアンの多くは、「ビング」 (Byngi) と縮めて呼ぶ。
- (3) 拙稿 (前掲論文)、特に Introduction, Ch. I を参照されたい。因みに、ハイレ・セラシエは「三位一体の力」を意味すると言われる。
- (4) 「ラス」は、エチオピアの貴族の称号と言われる。
- (5) “ground” と “foundation” の混成語と言われ、彼らのユニークな造語の一つ。ほぼ同義の “reasoning” と同様に、彼らの宗教的、教育的、娯乐的セ、ン、ヨ、ン (集まり) を指す。そこでは、音楽と共に話し合い、そして神ジャー (Jah...Jehovah に由来する語) への讃美がなされる。
- (6) 近年のカリブ海地域の社会情勢は、その政治・経済的変化に伴い不穏である。特に、ジャマイカ80年総選挙前の混乱は日本でも報道されたが、さらに拙稿、現地報告「80年ジャマイカ選挙を見てー経済悪化と社会主義政権の終焉ー」『アジア経済』一九八一年八月号 (Vol. 22, No. 6) を参照されたい。
- (7) 彼らの言い分によると、「彼ら (調査者) は我々を調査

し、テープに採録し、写真に撮り、得たい情報だけ得て勝手に解釈し、彼らの国で出版し利益を得ているが、貧しい我々には一セントも還元していない。」調査者をまるで「搾取者」のように言う者もいた。彼らの悪感情を煽ると、情報提供の返礼として法外な報酬を強要したり、フィルム等を眼前で焼き払ったこともあった。

- (8) ジャマイカ、そしてカリブ海全域におけるキリスト教の到来とその歴史的展開等については別に一考を要すが、ここではジャマイカへの福音派の到来年を示すにとどめる。(なお英国国教会アングリカンは福音派に含めない。本来の「福音」を説くどころか、植民者の悪徳を擁護し、体制と一体化した死せる宗教と化していたからである。)

モラヴィア派……………一七五四年  
バプティスト派……………一七八二年  
メソヂイスト派……………一七八九年  
プレズビテリアン派 (長老派) ……一八二七年  
因みに、これらの諸派は奴隷解放 (一八三八年) に大いに力があつた。

- (9) 礼拝や安息日 (Sabbath) の集会で、普通のキリスト教讃美歌を用いているラスタファリ・グループもある。
- (10) ジャマイカやその他のカリブ海地域でのブラック・パワーの抬頭と合衆国のそれとは違うが、ここでは触れず別の機会に回したい。
- (11) 現在のリサーチでは、ジャマイカにブルと呼ばれる人々は二ヶ所、セント・キャサリン行政教区のスプリング・ヴ

イレッジとクラレンドン行政教区のヘイズに存在するが、両者の音楽には顕著な相違がある。それについてはここでは省略するが、前者のみがナイヤビンギ音楽に酷似するので、本文中の「ブル」は前者のものを指す。

- (12) ドラムは三種類でベース (bass)、フンデ (fundeh)、(リ) ピーター ((re) peater) と呼ばれる。順に低音、「心臓」(中央)、高音部を担当し、フンデは「生命線」、リピーターは「語り」の役割を果たす。概して、山羊の皮が用いられ、マメ科のログウッド等の木材を胴部にする。ベースのみ両面皮が膨らめ (日本の大太鼓のような物)、ボロボロで頭部を巻いた木のバチが用いられる。後二者は片面のみで、両手で叩く。一般にグラウネーションでは坐って演奏されるが、ベースは奏者の膝の上に乗せられたり、置き台のような物で固定させられる。フンデとリピーターは腰かけた奏者の前に置かれ、両足の間にはさんで音を調整したりする。

他の打楽器では、日常の身边にある物ほとんどを活用し、例えばカラバッシュ (ひょうたん)、ポインシアナ (マメ科) のさや、ラトル (がらがら) 等の植物、おろし金や削り器等の台所用品から牛の鈴といった仕事用品までが振られ、打ち合わせられ、こすられ、あるいは叩かれる。

- (13) ジャマイカの歴史では最も新しい宗教運動で、しばしば学問的にはメシア (Messianic) 運動、千年王国 (Millenarian, Millennium) 運動 (論) の一事例として、またより文化人類学に近い表現としては、土着主義 (Nativistic)、

再生 (Revitalization) 運動の一環で捉えられてきた。その他、終末論 (Eschatology) や黙示 (Apocalyptic) 運動の要素も重視されてよい。「運動」ではなく、「カルト」(cult) と称される場合もままあるが、軽蔑の意味が込められることが多いので、ラスタファリアン自身はもちろんのこと、識者の間でもより中立的な表現「運動」が好まれている。同様の理由で「ラスタファリ (アニ) ズム」と教条主義的な表現「イズム」(-ism) も避けられる傾向がある。(矛盾しているようにもあるが、彼らに教条主義的なところが意外にあることは見逃せない。) 現実には、学問的枠組を崩してゆくような、また枠組の存在自体を無にするような要素で満ちている。

#### 付記

本稿(一)、(二)は、一九八一年一月に筑波大学大学院地域研究研究科に提出した修士論文 (Rastafarian Music in Jamaica : Its Historical and Cultural Significance) の一部をもとにした。用語は、現地語パトワ (patois=ジャマイカン・クリオール英語) とラスタファリアン特有の言語表現を活かし、筆者の耳で聴いた通りをカタカナ表現にした。

" Rastafarian Hymns "

--- Nyabynghi Music of the Rastafarian Movement in Jamaica --- ( 1 )

Yoshiko NAGASHIMA

Rastafarians are those who claim to worship or pay special attributes to the late Ethiopian emperor, Haile Selassie, who was called Ras Tafari.

This paper attempts to explain and discuss what Rastafarians call " Nyabynghi " ( originally meaning " Death to the white oppressors " ) music as their hymns from historical ( origins ), contextual ( expressions / contents ) and functional ( significance ) approaches. The writer made field research on the Rastafarian Movement in Jamaica while she stayed from 1978 to 1980, and this paper is written based on the local materials she gathered. The writer deals with their music mainly because she believes it clarifies what is hidden from other approaches and confirms the hitherto-known facts concerning the movement.

The history of Nyabynghi music signifies also the history of the movement and provides ultimately keys to understand Rastafarians' identity and their problems. Nyabynghi music was born under the two strong cultures from the slavery days, that is, ( Western ) Christianity and ( creolized ) African culture. Nyabynghi melodies ( tones ) and lyrics are strongly influenced ( more exactly, borrowed ) by Christian hymns, though arrangements in both aspects are strictly of their ( Rastafarians' ) own ( e.g., wordings and pronunciations ). Other characteristics shown such as in musical instruments and rhythm patterns are reflections of African

traditions.

Doubtlessly, the birth of the Rastafarian movement is closely linked with two local Black streams as precursors. One is Black Revivalism, a syncretic religious body ( creolized Christianity ) predominantly for descendants of African slaves who have dwelled in slums. Particularly, Bedwardism ( a unique form of Black Revivalism ) once stressed their black consciousness and prophesied against " white oppressors ". Another is Garveyism, a world-famous black power movement. Marcus Garvey's philosophy and opinions are partly but powerfully inherited to the Rastafarians' consciousness, thus reflected on Nyabyngghi lyrics.

In music, Burru and Kumina ( particularly Burru ), local traditions, are considered to have influenced on the formation of Nyabyngghi drumming. This is shown by the personal history of the principal initiator ( of N.drumming ), the late Count Ossie. Burru ( musical ) characteristics are clear in the names, types, making, ways of playing of drums, and other percussive instruments ; in basic rhythm ( ostinato ) patterns ; and in other related musical elements ( e.g., voicing, structure,) as well as in socio-cultural factors. Kumina tradition, on the other hand, is controversial in " genuine " influence because even musical elements differ ( from Nyabyngghi music ) excepting merely the basic rhythm pattern. Burru music, as a social tradition, might have been easily adopted and arranged by early Rastafarians who did not have their original ( religious ) music ; whereas Kumina, a religious music / culture, is well imagined to have given hesitation or even objection to the Rastafarians who proclaimed a new religion. ( continued )